

第3部へのコメント

西谷 正

まず、西村昌也論文は、空間的に見て南北に長いベトナムのうち、北部と中部の領域を議論の対象とする。そして、時間的には先史時代末期の紀元前3世紀から歴史時代の15世紀まで1,700年に及ぶ長期間の歴史的展開を、最新の調査・研究の成果を駆使して、詳細かつ多岐にわたって見事に活写されている。とくに、ベトナム北部のキン（ベトナム）族を中心とする多民族国家と、ベトナム中部でチャム族によって形成されたチャンパ国家との関係史を考える上で、ベトナム北部のタインホアを中心とする南域の重要性を論証された。

ここで、西村論文の趣旨からは少し離れるが、私の個人的な関心に照らして、いくつかの問題点を提起したい。まず、対象地域には、中国の漢代に郡県制という形で、交趾・九真・日南の三郡が設置され、漢帝国の直接・間接的支配が及んだ。そのことは、塼築墳という墳墓構造と土器・瓦塼・貨幣・銅鏡などの各種の出土遺物から裏づけられる。たとえば、ベトナム中部北域のクアンナム省・ビンイエン遺跡におけるサーフィン文化の寸胴型甕棺から前漢の日光鏡が出土していて、日南郡の設置と係わる遺物であろう。ベトナム北部に設置された交趾郡の郡治跡とされるルンケー（龍編）城跡からは、インドに器形の起源が求められるクンディと呼ばれる水注が出土する。この種の注口土器は、ベトナム南部のオケオ文化で頻出するといわれる。オケオ文化といえば、標準遺跡であるオケオ遺跡からは、よく知られるように、後漢の夔鳳鏡と方格規矩鏡破片が出土している。この地域は、『太平御覧』などの中国史書に見える扶南諸外国に当たるので、漢帝国の郡県制と合わせて、それが施行された地域からさらに南域に対する郡国制という視点での検討も必要であろう。つぎに、ルンケー城跡では、2世紀中葉までさかのぼる蓮華文のある瓦当が検出された。このことから、交趾郡における仏教との関係が強調される。この点に関しては、ルンケー城郭外の南域に位置するザウ寺の実態解明が待たれる。ルンケー城跡では、蓮華文とともに、人面文のある瓦当が盛行する。人面文瓦当は、ベトナム中部のチャキウ城跡では主体をなす。ここでは、蓮華文瓦当が見当たらないこともあって、ヒンドゥー教との何らかの関連性が指摘される。チャキウ城跡周辺では、ゴーカム遺跡において、「黄神使者章」封泥が出土し、黄神つまり道教との関係も想起される。このように見てくると、ベトナムの北部と中部における宗教の多様性についても思いをめぐらすのである。

そして、ベトナム北部南域のタインホア省で発見されたと伝えられる「晋婦義叟王」金印に注目したい。ここで気になるのが、婦義に対して叟王となっている点である。中国の印章制度によると、これまでの出土事例すなわち晋婦義叟侯・晋婦義羌侯・晋婦義氏侯に照らすと、婦義と表現する場合は、叟侯とすべきところである。ところが、本例では叟王となっている。叟王を重視すれば、滇王之印とか漢委奴国王の用例のように、叟王之印とか晋叟国王とでもなるべきであろう。その意味で、「晋婦義叟王」は

問題が残る。また、叟王という以上は、叟の国王を意味するが、出土地がタインホア省であれば、九真郡の所在地であり、そこに郡国制を見出しうることもなろう。

最後に、陳朝から黎朝にかけて、14～15世紀のころ、ベトナム産の陶磁器が東南アジア諸地域や日本に貿易商品として輸出されている。その一例として、ベトナム陶磁器を満載したホイアン沈没船に関連して、中国商人の関与が指摘された。北東アジアにおける貿易活動の重要な担い手は、綱司とか綱首と呼ばれる中国商人であった。彼らは、陶磁器の糸底部分に、徐綱とか鄭綱などの墨書を残していることがあり、日本とくに博多・韓国・中国・台湾などで出土する。ベトナムと東南アジア諸地域の陶磁器貿易におけるチャンパの役割とともに、中国商人のことも念頭に置いておきたいと思う。

つぎに、梁正錫論文は、古代の北東アジアとくに高句麗と渤海を中心に、宮殿様式の伝播と変容の過程を考察したものである。これまで都城制の比較研究はそれなりの蓄積をもつが、宮殿構造を取り扱った研究はほとんどなく、貴重な成果といえよう。

ここでは、高句麗の国内城期から安鶴宮期を経て、渤海の上京城期へと宮殿の変遷がたどられる。まず、高句麗の卒本城から国内城への変遷時期について、『三国史記』高句麗本紀に見える琉璃王22年(A.D.3年)とされるが、むしろ東上王代の3世紀初とするのが一般的ではなからうか。その国内城の郭内外で1960～70年代に行われた調査事例として、三ヶ所を紹介されるが、郭外のもう一ヶ所で1958年に調査された東拾子遺跡も、宗廟もしくは社稷の遺跡として見落とせない。郭内で1963年に調査された「太寧四年……」銘軒丸瓦の出土地点では、建物遺構は見つかっていない。1971年調査の東西2棟の建物群の性格に対しても判然としない。ましてや、北朝鮮のハン・インホの解釈のような、南宮・中宮・北宮が南北一直線上に並び、その周りを回廊が取り囲んでいたという状況ではない。続いて、国内城から安鶴宮に遷都するが、両者の位置選定や建物の配置・規模が共通していることと、国内城や安鶴宮の系譜を曹魏の鄴城や漢の未央宮にそれぞれ求められる。しかし、鄴城との比較が可能なだけの資料は、現在のところ国内城では見出せない。ともあれ中国との比較という点では、洛陽城も視野に入れるべきであろう。その点で、安鶴宮では新たに魏晉南北朝の太極殿と東西堂制を採用したとされる指摘は共感を覚える。ただ、どの王朝かを具体的に考えるとき、当時の国際関係からいうと北魏の洛陽城がモデルになっていた可能性がある。

渤海の上京龍泉府における宮殿建築の平面構造が、唐の大明宮などのそれより高句麗の安鶴宮との関連性を指摘される点は、渤海が高句麗の継承国家であると認識する立場から首肯できよう。上京龍泉府では、王宮の東南隅に園地が築かれている。安鶴宮の場合も、同じように東南隅に園地が想定される。唐・長安城の太掖池や新羅・金城の雁鴨池なども合わせて、王宮全体の比較を通じて、長安城・渤海城・金城相互間における共通性と独自性をトータルに見ていく視点なり作業が期待される。なお、高句麗の後期には6世紀後半に入って、平壤城は安鶴宮から長安城に移都する。その長安城のとくに羅城で囲まれた、方格地割の計画都市である外城をめぐる諸説がある。私は、東魏・北齊の鄴城を考えているが、この問題もまたこんごの課題である。

最後に、石井龍太論文は、琉球諸島の瓦の分析を通して、王権・制度・思想と交流などの諸問題を取り扱った稀少で、意欲的な研究である。まず、瓦の分類のうち、滴水瓦が独自の建築景観を醸し出すとして特徴づけられる。日本では、古代寺院や中世城郭の限られた地域でわずかに出土する。中世の滴水

瓦は、李朝（朝鮮）時代に系譜が求められるが、王権・交流といった面で接点があり、こんご琉球諸島の滴水瓦と合わせて検討する必要があるだろう。

中世の琉球諸島において、高麗瓦匠による造瓦が特徴的であり、共伴する高麗青磁からも高麗との密接な交流がうかがえる。合わせて、日本列島本土の瓦との類似性から「大和系瓦」と呼ばれる一群の瓦がある。一方、琉球諸島の近世瓦について、明の影響下に成立したと推測されることから、「明朝系瓦」と呼ばれるものがある。それに対して、瓦の個性を強調する観点から「琉球近世瓦」の呼称を採用されている。それならば、中世瓦の「大和系瓦」についても、「高麗系瓦」と区別して「琉球中世瓦」と呼ぶべきであろうか。なお、「明朝系もしくは琉球近世瓦」の紋様の類例が宋代の瓦に求められるという指摘に関して、博多では宋・元代の紋様瓦が出土し、中国人貿易商の綱首・綱司の建物との関連が考えられることを参考までに付記しておきたい。琉球諸島の中・近世の瓦の使用例つまり瓦葺き建物は、権力者と関係の深い王府などの施設と寺院など宗教関係に限定的であると指摘される。この点は、日本・朝鮮も含めて広くアジアの普遍性といえるであろう。その中で、黄色と龍は皇帝・天子の象徴であることに照らして、首里城正殿における龍頭や瓦の色彩も問題になろう。

瓦の思想をめぐっては、防火と装飾性さらには社会的地位などの多面性の指摘は興味深い。ともあれ、琉球諸島における瓦と瓦葺き建物は、王府のあった首里に集中し、また、王権と深い係わりを持ち、社会構造の反映という側面をも持ち合わせていたことがうかがわれる。石井論文は、瓦を単に考古学上の遺物として分析するにとどまらず、社会史の資料にまで昇華された点が最大の成果といえよう。